



第41号
 月 1 回 発 行
 ひの心を継ぐ会
 〒799-1336
 住所:愛媛県西条市
 上市甲 720-1
 TEL:080-2986-0856

綱 領

- 私達は明德を明らかにします
- 私達は国家の鎮護となります
- 私達は大和世界を建設します

神道(十三)(大和世界の建設)

古事記

神秘的方法(1)

プラトンの「イデア」

しばらくは神の本居をたち出でて

退方の極み道拓きせむ

竹葉 秀雄

私はこれから西洋哲学の歴史を観てゆくのに田辺元氏の「哲学通論」を借り、これを流派として他の物を附加し、必要に応じ私の意見を入れることとする。田辺氏の文章は難解の点もあるが私は信用するので、その意を誤るのをおそれて出来るだけ原文のままを用いさせて貰う。

哲学は、その立場の必然の要求として、其の方法は相対と絶対との相即を論理的に媒介するものでなければならぬ。絶対は単に相対に對立し、之を超越するのみでは、却って絶対でなく一の相対に過ぎない。それが絶対である為には自己に對立する相対が同時に自己であるという對立の統一に於て、相対に對し超越的であると共に内在的であらねばならぬ。併し内在的というのは相対と絶対とが對立なき一に帰することであつてはならぬ。斯かる同一は絶対の相対に對する超越對立を廢棄する。内在は超越に即し、對立者の統一を意味するのでなければならぬ。斯かる對立の統一、相対と絶対との超越的内在が論理的に媒介せられることが哲学的方法の要件なのである。

この要求が、矛盾律を最後の原則とする分析論理の満たし得る所ではない。其の對立が却て統一を成すものとして絶対統一的に把握する為には、何等か分析論理を超越する高次の論理が無ければならない。「弁証法」は端的に對立するもの統一を思惟する論理である。然るにこの「弁証法」を十分に認めない限りは、分析論理の、哲学的方法に對し不十全なることから、一般に思惟を斥け、論理的思惟は對立から對立へと動き、常に相対の圏内を彷徨するものと考へ、斯る比量的思惟 *diskursives Denken* (*discursus* 彷徨、*discurre* 彷徨する)を斥けて、直感的に相対(自己)の絶対と合一することを以て哲学の正常なる方法となすのは自然の事である。これが「神秘的方法」である。哲学上に於ては、「反省」の間接なるに對し、生の直接の意識を「体験」と称するが、体験を知識の立場から觀て「直観」という。神秘的直観は絶対と相対との合一の体験に由る直観である。それは相対の絶対に對する對立的獨立性を認めないことに特色を有する。従つて相対なるものの相対として獨立の意義を有することを要求する歴史を否定し文化を否定して、絶対にのみ眞実の存在性を認め、一切相対を此絶対の統一に吸収する傾向を多かれ少かれ有するものである。それが、相対の反省を媒介することなしに、直接に絶対の統一に於て生きることを信仰の内容とする宗教と、傾向上、相一致する所多きは明であらう。

農士道

菅原 兵治

分散から統一へ

三浦 夏南

第四章 士道論

第四節 士たるの生活

「十」と「一」

かく、「志」によって完全に統制せられたる人格生活をなす者を「士」と言うのである。今之を説文学的見地より見れば、「士」は「十」と「一」との会意文字であるとされている。「十」は数多き欲求群を指している。次から次と起り来る諸々の事象—之に対して起る欲求、それは生きて行く人間に於いては実に限り無く生じ来る「多」である。この「多」なる欲求群を「十」を以て現すのである。而して此の「十」なる欲求群をよく統制し規格して、生活に礼あらしめて行く統一原理—三軍の帥に当る「志」を「一」を以て現わすのである。此の「一」なる「志」によって「十」なる欲求群が完全に統一せられて行くところに「士」たるの生活があるのである。「士」を「十」「一」の会意文字を以て表現せし東洋古聖賢の深き人生哲学に、私はいつもながら敬到止まざるものである。

(註) 猶此の「士」を社会的に見れば、支那の社会的階級より天子、公卿、大夫、士、民と分つ觀念よりして、民衆の指導者という意味になる。其の場合は民衆を「十」を以て現わして多数、衆庶を意味し、其の上に立つ指導者を「一」を以て現わす。参考に図解すれば左の如きか。(図省略)

然し其の内面的考察より之をなせば、苟くも社会的指導者として民衆を統制指導して行く程の人物は、其の人格内容に於て「士」たる道義生活を備うるを要すべく、この「士」の一字を以て、政治と道徳「政」「教」両面の消息を教えたことは如何にも含蓄的な東洋思想的で懐しいことである。

近代の日本、とりわけ戦後の我が国は社会のあらゆる面で、分割分散を行って来た。家と言えば、共同体の中に位置づけられた一族としての家から、所謂三世帯家族、三世帯家族から核家族、最近では母子家庭、父子家庭も珍しくないし、子供を持たない夫婦のあり方までもが宣伝される状態である。この次に待っているものは生涯を独身で終える者の急増や、生まれた子供をすぐに施設に預ける夫婦の常識化など恐ろしい状態が待っていそうである。教育で考えても、何故あれほど多くの教科を教えられていたのか不思議なほどである。国語、数学、理科、社会、英語、技術、体育、美術等、あきれるほどに非日常的で実社会に適さない科目が「基礎学力」として詰め込まれていたのであるから、子供たちの頭の中が整理がつかず、混沌として明確な信念、思考力を持つことが出来ないのも当然のことである。経済を考えても、極端な分業化専門化が行われて、その組織のみで生活を営むシステムというものが失われてしまった。つまり自治機能の喪失である。相互に依存し、相互に消費しなければ、生きて行くことが出来ない経済システムを形成してしまった。宗教、思想の自由ということが言われるが、自由というよりも明確な信仰を持てずばんやりとした唯物論に支配されている状態である。このぼんやりとした唯物論に支配されるのも、思想哲学が頭の中に混然としていて整理がつかないためである。

いくつか代表的な事象を取り上げたが、我が国が抱える問題の共通点は物事を分割し分散させすぎた結果である。分散させることは、個人の感覚で言えば楽であり、為政者の側からしてもコントロールしやすい状態を生むが、それは同時に自主独立の放棄である。統合統一への道は苦しみを伴うが、自立へとつながる唯一の道である。具体的に言えば、妻を持たず、独り身でいることは家族を持つ人に比べて気が楽かもしれない。核家族の人から言えば、親と暮らすよりは楽かもしれない。三世帯家族から言えば、一族の中で暮らすよりは多分苦勞しなくて済むだろう。しかし、一族で暮らせば、自分たちが食べるものを自分たちで作って尚時間が余るかもしれない。三世帯で暮らせば、子供の面倒は祖父母に任せて、保育園に子供を

預ける必要がないだろう。気苦労、軋轢は増えるかもしれないが、間違いない家は強く豊かになるのである。そしてこの気苦労、軋轢のなかで皆が和合して生活し、協働できるように、礼楽、祭祀、倫理等古の人が大切にしてきたものが生まれて来たのである。我々近代の人間は、一身の安楽の為に礼楽を捨て、祭祀を簡略化し、倫理をあいまいにして、統合から分散への道を行ってきた。その結果虚しい物質的繁栄は手に入ったかもしれないが、誰も独立することが出来ず、資本主義経済下の中で誰しもがマネーの支配下に置かれている。今こそ我々は自立と誇りの為に立ち上がり、祖先が大切にしてきたところの礼楽、祭祀、倫理を自らの家に確立し、家族の確執を昇華して、一族再建、共同体再生のくまの道を行まねばならない。

とよくも農園だより

三浦 美恵

苦勞して完成させた灌水設備で水やりができるようになったと喜んでいたのでつかの間、三年前の西日本豪雨を想起させる長雨が始めました。日照りが続いていた頃は、雨が待ち遠しく、恵みの雨を期待していましたが、こうも長く続く病気の原因になり心配です。日本の農業は海外と比べて農薬の使用率が高く、その理由は高温多湿の気候で病害虫の被害に遭いやすいからだと言われています。雨上がりには防除を行い、丁寧に作物を育てていきたいと思っています。



今日は日照りや長雨、風による影響を受けながらも、アスパラガスは安定して朝夕正品だけで七、八キロ収穫できています。里芋もぐんぐんと育ち、頻りに畝間灌水していたお陰か今では私達の頭を優に超え、ニメートル以上の背丈にまで伸びています。村の方からも、「立派にできてから収穫が楽しみだね」とお褒めの言葉をいただきました。来月からはその里芋もいよいよ収穫ができそうです。ネギも多少柔らかくなっていますが、カルシウム等の微量要素をしっかりと加えていたお陰で、きれいな状態のものが収穫

できています。周りの農家さんから話を伺うと、長雨にやられて野菜が収穫できずに困っていると聞きます。窒素・リン酸・カリという野菜を大きく育てるための肥料だけでなく、力強く、丈夫な作物にするためのカルシウム等微量要素を入れて育てていたことが、今回のような非常事態に良い結果として現れたのだと思います。

最近、晴れた日には農作業に明け暮れ、雨の





日には今後栽培を検討している穀物の育て方・加工法を本で学んでいます。まさにお天道様とともに生活し、晴耕雨読の日々を送っています。このように、農業をしていると仕事が大きく天候に左右されるため、自ずとその日の気温や風に敏感になります。天気という一個人の力ではどうにもならないものに対して祈り、その恩恵によってできた作物に感謝してお祭りをするのは、古人にとって何も特別

なものではなく、ごく当たり前の発想なのだ、帰農して始めて気が付きました。朝夕の家族揃ったの参拝の後、長男が神棚を見上げて「神様が喜んじる」と呟いていました。きっと神様も私達のことを見守って、応援してくださっているのだと思います、明日からも日々の仕事に全力で打ちこみます。

★今後の予定

先月に引き続き個別での勉強会の対応をさせて頂いています。ご希望の方は事務局までお電話ください。

★一燈照偶 万燈照園

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願ひ申し上げます。

★年会費

一般会員	三千元
賛助会員	一万円
特別賛助会員	三万円
支援会員	一万円

★振込先

「ひの心を継ぐ会」
愛媛銀行・本町支店・普通預金
口座番号 6142735